

西光寺だより

第二七八号 令和七年六月一日発行

六月になりました。梅雨そして紫陽花と自然の移り変わりを肌で感じる季節となりました。

梅雨の代名詞とされる紫陽花、小さなお花がぎっしり寄り添って大輪の花となり、どこのお庭にも咲き目を楽しませてくれます。

日本生まれのお花、今では世界中で親しまれている紫陽花。

非常に咲いている期間が長いことからつけられた花言葉は、「辛抱強い愛情」とされ、私たちにも長い時を楽しませてくれます。

そして、「無常」という花言葉もあるようで花の色が時間とともに変化していくことからきているそうです。

そして「無常」というと、仏教の「諸行無常」という言葉を思い出すことでありますが、決して悲しい言葉ではありません。良くも悪くも日々の日常や考え方、思いなど移り変わってゆくものであります。

仏教の詩を多数作っておられた詩人の坂村真民さんの「花」という詩があります。

花には

散ったあとの

悲しみはない

ただ一途に咲いた

喜びだけが残るのだ

常が無い無常のことわりの中でありながらも、いのちの輝きを教えてくれる花を愛でながら、この上ない輝きを喜ばせていただきたいものであります。

△ほとけさまのお話△

人それぞれ味わい方・見方がありますが、こんな心でお花をいつくしみ・楽しませていただくことも深い意味があるのではないでしょうか。

湿気の多い季節ではありますが、紫陽花の大輪そそがれる雨のしずくに、さわやかな、涼しさを感じていただければと思います。

合掌



●今月のことば●

あるお寺にお参りをされた方がそのお寺の住職さんにこんな質問をされたそうです。

「手を合わせたら幸せになれるんですか」

この質問に対してご住職は、

「手を合わせたからしあわせになるわけではありません。

手を合わせずにはいられない、そのようなものに出遇えたことが

しあわせなのです。」

とお答えになったそうです。

これは知り合いのお坊さんから教えていただいたお話で、私はなんだか価値観をガラリとひっくり返されたような思いがしました。

それは、私にとってしあわせとは、私の願望が叶うことであり、今ではないいつか、ここではないどこかにあって、自分の努力や心がけの先に手に入れられるもののように捉えていたからだと思います。

このご住職のおっしゃる、手を合わせずにはいられない気持ちを、僧侶であり教育者でもいらっしゃった東井義雄先生（1912～1991）の詩にうかがうことができます。

「無理をせんといてください」

「無理をしないで休んでいてください」

腰が曲がつて ひどく小さくなってしまった老妻に

何べんも気づかってもらいながら 土手の草を刈る

何だか うれしく 何だか しあわせで……

(『何だか うれしく』より)

自分に向けられたあたたかな眼差し、やさしい思いやりや言葉がけにふと気づかされた時などに、うれしさや申し訳なさ、ありがたさと共に私たちは思わず手を合わさるのではないでしょうか。

それは、いつか・どこかにあるのではなく、今・もうここに恵まれているのです。

私たちのご本尊は阿弥陀如来。

幸せを求めて七転八倒しながら生きる私をご覧になり、お願いしたわけでもないのに、途方もないご苦労を経て私のための救いを完成し私のもとに来てくださった仏さまです。

お寺の本堂やお仏壇は、阿弥陀さまの私たちに向けてくださった大いなるお心に出遇わせていただく所です。

また、先立たれたお方からいただいたご恩に改めて気づかされるところでもあるでしょう。

「しあわせなら手を合わそう」ともどもに手を合わせましょう。

《大谷本廟》

◆先月の報告◆

五月二日(金) 西光寺本堂にて西光寺講総会を行いました。

会計報告・行事報告を行いました。そして新役員になられた方々には、今年一年どうぞよろしくお願いいたします。旧役員の皆さま、本

当にありがとうございました。

そして、役員の皆さまどうぞよろしくお願い申し上げます。



◆六・七月の行事◆

・六月 十八日(水)

茨木東組聖跡巡拝バスツアー

京都方面

(追記)参加定員に限りがあり、先着順とさせていただきます。